

奴隷貿易

——ファニーとジェインの口の端にのぼるとき——

武井 暁子

オースティン家と植民地

1813年1月24日付のジェイン・オースティン（Jane Austen, 1775-1817, 図版①参照）の書簡の一節から始めよう。

私たちは読書三昧です。お母様（Cassandra Austen, nee Leigh, 1739-1827）はジョン・カーの『スペインの旅』を手に入れ、私はチョートン読書会から借りた、陸軍工兵隊大尉チャールズ・ペイズリー著『大英帝国の軍事政策と機構に関するエッセイ』の八折版を読んでいます。この本に最初異議を唱えましたが、試に読んでみたところ、とても楽しく面白く書かれているとわかりました。クラークソンやブキャナン、もしくはロンドンの二人のスミス氏と同じくらい、ペイズリーが好きです。兵隊に初めて憧れました。本当に並外れた力と熱意で書いているのです。¹

この時期、オースティンは『マンズフィールド・パーク』（*Mansfield Park*, 1814）執筆中だったが、そのかたわら読書にいそしむ本好きがみとれる。書簡でオースティンが敬意を表する人物だが、ペイズリー（Charles Pasley, 1780-1861）は爆破と包囲戦のエキスパートで、アメリカ独立後、

イギリスが海外領土を保持するためには、植民地を兵士と海兵の供給源として活用することが不可欠だと説いた。オースティンが絶賛した 1810 年出版の『大英帝国の軍事政策と機構に関するエッセイ』(*Essay on the Military Policy and Institutions of the British Empire*) は、1812 年までに 4 版を重ね、高く評価された。クラークソンは、奴隷貿易廃止運動家トマス・クラークソン (Thomas Clarkson, 1760-1846) のことである。ブキャナンとは、神学者でインドでのキリスト教布教に尽力したクロード dias・ブキャナン (Claudius Buchanan, 1766-1815) だ。二人のスミス氏とは、当時人気があったパロディ作家、スミス兄弟 (James Smith, 1775-1839, Horatio Smith, 1779-1849) のことだ。



図版① ジェイン・オースティン (1810 頃)
ナショナル・ポートレートギャラリー蔵

書簡に名前が登場する人物の中で、オースティンの時代の植民地と奴隷貿易について、従来よりも深い考察をする上で注目すべきなのはクラークソンだ。クラークソンはケンブリッジで数学を学び、父親の後を継ぎ牧師になる予定だったが、1784 年、奴隷貿易について書いた論文が学内の懸賞論文で一等を受賞する。これをきっかけに、イギリスとアフリカ大陸間の奴隷貿易廃止運動に生涯関わるようになり、グランヴィル・シャープ (Granville Sharp, 1735-1813)、ウィリアム・ウィルバーフォース (William Wilberforce, 1759-1833) らとともに主導的役割を果たした。

アイリーン・コリンズ (Irene Collins) は、「18世紀末のイングランド知識階級は植民地や海軍関連のことに関心があった」と言う。² 実際、オースティン家も植民地や海軍とは密接な関わりがあった。父ジョージ (George Austen, 1731-1805) は、オックスフォード時代の教え子ジェイムズ・ラングフォード・ニブズ (James Langford Nibbs) が西インド諸島アンティグアに所有する地所の管財人を務めた。³ 兄フランシス (Francis William Austen, 1774-1865) と弟チャールズ (Charles John Austen, 1779-1852) は海軍軍人だった。従姉エリザベス (愛称イライザ, Elizabeth [Eliza] de Feuillide, né Hancock, 1761-1813) の名付け親ウォレン・ヘイスティングズ (Warren Hastings, 1732-1818) は東インド会社のやり手で、初代インド総督になった大物だった。

オースティン家と植民地の関わりは作品にも影響を及ぼす。初期作品の「ジャックとアリス」("Jack and Alice") 結末で、登場人物の一人は玉の輿に乗り、ムガール宮廷で妃の一人になる。『分別と多感』(*Sense and Sensibility*, 1811) では、ブランドン (Colonel Brandon) がインドに赴任する。

オースティンの作品中、植民地経営の負の遺産である奴隷貿易に言及するのは『マンズフィールド・パーク』の主人公ファニー・プライス (Fanny Price) と、『エマ』(*Emma*, 1816) のジェイン・フェアファクス (Jane Fairfax) の二人だ。しかし、ファニーの発言の詳細はテキストでは語られず、バートラム家全員に黙殺される。ジェインのそれは、エルトン夫人 (Mrs Elton) の「サクリング氏 (Mr Suckling) は奴隷貿易廃止支持者ですよ」⁴ という頓珍漢な応答によって、強引に方向転換させられる。

ファニーとジェインの発言が持つ意味については後段で論じるが、先の書簡でのオースティンのクラークソンとペイズリーへの傾倒と合わせて考えると、ファニーとジェインに対する周囲の反応は、当時のイギリス中産

階級の間で奴隷の人権への関心は高まりつつあった一方、国の発展のためには植民地拡大及び労働力——奴隷——は絶対必要だ、という矛盾した認識を持ち、何の疑問もいだかなかったことを示すものと読める。この点を明らかにするために、クラークソンの著作を参照し、オースティンの時代の植民地と奴隷貿易の実態を概観し、ファニーとジェインの発言の社会的・政治的背景を新たな視点から読み解く。

アフリカ大陸での奴隷貿易の始まり

初めに、奴隷貿易の根源である奴隷制と貿易の成り立ちをみていく。⁵ 奴隷制は世界最初の文明といわれるメソポタミア文明の時代にすでに存在した。その後、古代ギリシャ、ローマでも奴隷制は存在した。共和制ローマ時代に入り、キケロ（Marcus Tullius Cicero, 106-43BC）は紀元前 54 年に、シーザー（Gaius Julius Caesar Augustus, 63BC-14AD）が奴隷にしたブリトン人はあまりにも愚かなので、ローマのマーケットで高値をつけられない、と書いた。この頃は、戦勝国が敗戦国の軍隊や国民を奴隷にするのが一般的だった。

アフリカ大陸での奴隷貿易を本格的に始めたのはイスラム人で、3 世紀にアフリカ北部にラクダを連れてきて以来、サハラ砂漠を横断しての奴隷貿易をやりやすくし、儲かるビジネスにした。イスラム人の後、奴隷貿易に参入したのはポルトガルとスペインだった。1430 年代に両国は捕虜にしたカナリア諸島住民を奴隷として使い始め、アゾレス諸島やマデイラ諸島でヨーロッパ人の囚人を使って砂糖栽培を始めた。その後、主導権はポルトガルに移り、1441 年に最初のアフリカ人奴隷が黄金とともにリスボンに連れて行かれ、1444 年にアフリカ本土で 235 人を捕獲し、母国で売った。1493 年には教皇アレクサンドル 6 世（Pope Alexander VI, 1431-1503）

がカナリア諸島南部とカリブ諸島西部をポルトガル所有とし、アフリカ人のアメリカ大陸への輸出の独占と、新たに発見した土地はどこであれ所有することをポルトガルに認めた。

一方、イングランドは奴隷貿易でポルトガル、スペインに後塵を拝した。1562年から三度に渡って、エリザベス1世（Elizabeth I, 1533-1603, 在位 1558-1603）の援助を受け、海軍軍人で奴隷商人でもあったジョン・ホーキンス（John Hawkins, 1532-95, Hawkyns という綴りもある）は西アフリカに奴隷貿易目的の航海に出た。最初の2回（1562～63, 64～65）は首尾よくいったが、3回目（1567～69）はメキシコでスペイン軍に捕えられた。ホーキンスは命からがら逃げ帰ったが、水夫たちは数年間捕虜になり、絞首刑や火刑に処せられた者もいた。ホーキンスは約1,000人のアフリカ人をアメリカに輸出したとみられる。

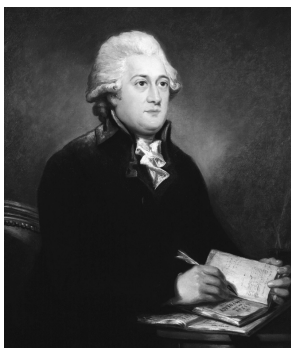
1588年にスペインの無敵艦隊を破ったことで（この時の提督はホーキンスだった）、イングランドによるアメリカの植民地化は軌道に乗った。クロムウェル（Oliver Cromwell, 1599-1658）時代に奴隷貿易は下火になったが、王政復古とともに再び盛んになった。1712年、奴隷貿易は特定会社の独占事業から自由競争制に移り変わった。1713年、ユトレヒト条約によりスペイン所有の植民地で奴隷貿易の特権を得て、1750年までにアメリカ大陸への奴隷貿易を完全に手中に収めた。以降イングランドの奴隷貿易は最盛期に入り、1750～1807年まで300万人の奴隷が植民地へと移送された。リヴァプールから出航する船はヨーロッパ全体の40%を占め、その他ロンドン、ブリストル、ランカシャーからも船が出航した。奴隷貿易から上がる収益は莫大なもので、エリック・ウィリアムズ（Eric Williams）は、三角貿易はイギリス産業の発展に大いに貢献し、最大の拠点であったリヴァプールの富はランカシャーの人口増加、ひいてはマンチェスターの生産力増加を促進したと、言う。⁶これが1807年に奴隷貿易

廃止法が可決される前までの状況である。

奴隷貿易廃止運動の理念と実態

それでは、奴隷貿易廃止運動の主導的立場にあったクラークソンの経歴を紹介しておこう（図版②参照）。⁷クラークソンは1760年3月28日、ケンブリッジシャー、ウィズビーチに三人兄弟の長男として生まれた。父ジョンは牧師のかたわら、地元のグラマースクールの校長を務め、母アンは裕福な医師の娘という知識階級だった。クラークソン兄弟は父の縁を通して、自分たちはシャープの遠縁と信じていた。4歳下の弟ジョン（John Clarkson, 1764-1828）は、クラークソンたちの運動に協力した。

クラークソンは、1779年に父の母校ケンブリッジ大学セント・ジョーンズ・カレッジに進み、4年後、数学士号を取得する。そして、父の後を継ぐためにさらに大学に残り、先に述べたように、1784年に学内の懸賞論文で一等賞に輝いた。この論文はラテン語で書かれていたが、1786年に『奴隷制と人間、特にアフリカ人売買に関するエッセイ』（*An Essay of the Slavery and Commerce of the Human Species, Particularly the African*, 以下『エッセイ』と略記）というタイトルで、クエイカーのジェイムズ・フィリップス



図版② トマス・クラークソン（1788）
ナショナル・ポートレートギャラリー蔵

(James Phillips) の出版社から刊行された。クラークソンはアングリカンだったが、奴隷貿易廃止運動ではクエイカーたちが中心的存在であり、海外のクエイカーたちとも連携した (図版③参照)。



図版③ 奴隷のメダイヨン

1787年にウェッジウッドがデザインしたものをもとに1962年に復刻制作したもの。白地のジャスパーの上に黒人奴隷のレリーフと "Am I not a man and a brother?" という文言がある。このメダイヨンはアメリカ合衆国の奴隷貿易廃止賛成派にも送られた。

この本はまたたく間に売れ、1787年の奴隷貿易廃止協会設立のきっかけになり、ウィルバーフォースらが活動に参入した。この協会は本質的に奴隷制そのものに反対だったが、当面奴隷貿易廃止のみを活動目標にし、ひいては奴隷貿易廃止は植民地での奴隷制に影響を与えないと公言さえした。時代的な制約があったといえよう。

協会設立後、クラークソンはイギリス全土を回って、奴隷貿易船の元船乗りたちの証言を得て、奴隷の拷問に使われた手枷足枷を証拠物品として押収する役目を引き受けた。1787～94年の7年間にクラークソンが出張した距離は、通算35,000マイル (約56,000km、地球の直径の4倍を超える) で、特に、マンチェスター、リヴァプール、ブリストルはイングランドの奴隷貿易の拠点だったため、この三つの町には繰り返し出張した。

これまでの研究では、イギリスでの奴隷貿易廃止のきっかけとなったのは、1772年のマンフィールド判決、1781年のゾング号事件などの奴隷関連の事件、及び先に述べたようにクエイカーたちの勢力拡大と考えられている。さらに18世紀後半、中産階級の間にフィランソロフィーの精神

が根づき、個人の人権への意識が高まったことは見逃せない。監獄、精神病患者収容施設の改善運動と奴隷の人権への関心がともにこの時期に始まったのは注目すべきだ。

もう一つは、人間は生まれながらにして自由で平等である、との思想の広がりだ。クラークソンの言説は後で詳しく論じるが、人間の自由は売買できないもので、強制的に他人の自由を奪うことはできない、というのが彼の思想の根幹だ。クラークソンの革命思想理解が単なる理論上のものではないことは、彼が革命直前のパリに行き、ラファイエット (Marie-Joseph Paul Yves Roch Gilbert du Motier, Marquis de La Fayette, 1757-1834)、ミラボー (Honoré Gabriel Riqueti, Comte de Mirabeau, 1749-91) らの大物政治家と会見したことからもわかる。

文学史の流れをみると、クーパー (William Cowper, 1731-1800)、ブレイク (William Blake, 1757-1827)、ワーズワス (William Wordsworth, 1770-1850)、バイロン (George Gordon Byron, 1788-1824)、シェリー (Percy Bysshe Shelley, 1792-1822) 等のロマン派詩人たちが奴隷貿易反対だったのもうなずける。ことに、ワーズワスはクラークソンと親交があり、1807年の奴隷貿易廃止法可決後、クラークソンを讃えるソネット ("To Thomas Clarkson," 1807) を書いた。次がソネットの全文である。

クラークソン！その丘は登るのが困難だった
君にとって、何と骨が折れる、いや危険だったことか
あまねく知れ渡っている。誰も君ほどの思い入れは持たなかった
しかし、君は血気盛んな青春時代を皮切りに
壮大な長旅へと踏み出し
内なる声が休むことなく使命を繰り返すのを聞いた
その使命は、君の若い心の神託を司る場所から生まれ

まず君の中で根をおろした。

おお、時のくびきにまともにつながれた者よ

義務の恐れを知らぬ僕よ、見よ、勝利は勝ち取られた

そして、すべての国に勝利が与えられるだろう

血に染まった書物は永遠に破られる

そして、君は良き人間が与えられるべき平穩を得るだろう

そして、偉大な人間が与えられるべき至福を。

君の熱意はようやく安息を見出す。人類の忠実な友よ！⁸

ワーズワスの友人の偉業に対する敬意や親愛の情が率直に唄われているが、そこに至る道は困難の連続だった。奴隷貿易廃止運動の実態は、オーステインも読んだ『アフリカ人奴隷貿易廃止の開始、進展、完了の歴史』(*The History of the Rise, Progress and Accomplishment of the Abolition of the African Slave Trade*, 1808, 以下『歴史』と略記)に克明に描かれている。興味深い事例を挙げると、①証言を約束した外科医が植民地帰りの有力顧客を失うのを恐れて突如証言を拒否し、せっかくの訪問が徒労に終わる、②奴隷商人がクラークソン側の証人を買収する、③新聞が大々的に奴隷貿易廃止運動反対キャンペーンを展開して議員に圧力を加えようと図る、などだ。そればかりか、リヴァプールでは、クラークソンに脅迫状が届いた直後、波止場で襲撃されて、あわや溺死という命にかかわる危機もあった。

これほどの苦勞をしても、議員の中に『マンスフィールド・パーク』のファニーの伯父サー・トマス・バートラム (Sir Thomas Bertram) のような植民地に地所を持つジェントリーや、奴隷貿易で財産を作った商人が多くいたため、法案提出前に動議がつぶされることが多く、提出にこぎついても否決された。フランス革命後、ナポレオン (Napoléon Bonaparte, 1769-1821) が政権を取ると、イギリス議会の空気は緊迫したものになり、

国益を損なうような議題は敬遠された。戦下の危機的状況は、サー・トマスがアンティグアからの帰国途上、船がフランスの民間武装船に襲われそうになる、というエピソードにもかいまみえる。

『歴史』に登場する奴隷貿易賛成派の一人にノリス氏 (Mr Norris) という奴隷貿易船の元船長がいる。クラークソンは友人からノリス氏を紹介され、二人はリヴァプールで会った。最初、クラークソンはノリス氏を「洞察力と才能があり、話し方と行儀がよい」と感じた。⁹ 事実、ノリス氏はアフリカでの奴隷狩りの実態について包み隠すことなく話し、リヴァプールの奴隷貿易支持者の前で同じ証言をしたときも堂々としていた。だが、1788年2月、司法委員会による喚問では証人になることを拒否したばかりか、奴隷貿易賛成派の証人に寝返り、クラークソンを妨害する。節操がなく二枚舌のノリス氏はファニーの伯母ノリス夫人 (Mrs Norris) の人物設定に多大な影響を与えているとの、ジョン・ウィルトシャー (John Wiltshire) の解説は説得力がある。¹⁰

クラークソンの言説

『エッセイ』は奴隷貿易廃止を説く入門書で、それほど長くない。3部構成になっており、そのうち第1部はイントロダクションで、古代ローマ帝国の時代に遡り、人が奴隷になり商品として売られる経緯の説明がされる。奴隷貿易に対する批判がなされるのは、第2部と第3部だ。クラークソンは奴隷貿易の非道さを弾劾し、奴隷貿易を正当化してきた詭弁に対して反論する。

クラークソンの論の進め方の特徴は、二項対立や比喩を多用したわかりやすい説明にある。一例を挙げると、2部2章で、人間が自由を剥奪され、服従に陥る要因は強制と同意のどちらかだと主張する。続く3章では、服

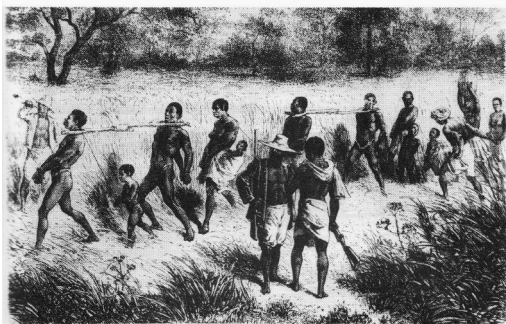
従と自由の対比は政府、幸福の定義に発展し、自由は人間が生まれ持った権利であり、政府は二次的権利だと述べ、政府というのは契約で、最大の目的は人間の幸福だと論じる。比喩に関しては、例えば、4章で自然は人間を生来自由に作り、心と体は自分だけのものである、従って何人たりとも同意なしに奴隷状態になることはなく、同じ理由で人間は物ではない、と論を進める。そして、先に述べた通り、人間の自由は売買できないもので、強制的に他人の自由を奪うことはできない、との主張は繰り返し強調される。

さらに確認するなら、物事の本質として、自由は売買することは不可能なのだ！自由は売り渡すことも出来なければ、買い取ることも出来ない。もしも、誰か——別の言い方では主人——が他人——別の言い方では奴隷——の自由に絶対的権限を持つなら、後者にはこれらの犯罪に関する責任を問えない、なぜなら主人が命じたからかもしれないからだ。さて、理性的存在は皆自らの行動に関して責任を持つことができるので、そのような権利は正当に存在できず、人間の自由は当然ながら売買いずれの可能性も論外であることは明らかだ。(傍点は原文イタリックス)¹¹

奴隷貿易を正当化する支配的な論理の一つは、アフリカ大陸は暑さ、嵐、暴風雨などのため、劣悪な気候であるから、住民を離れさせることは彼らのためだとの詭弁だ。それに対して、人間は生まれた土地とそこに住む人間に自然に愛着を持つものであり、祖国から遠く引き離され、奴隷船上で危険で惨めな時を過ごす間、自分の故郷に思いが行くものだと、クラークソンは言う。ちなみに、故郷から引き離すことが本人のためになるという理屈は、『マンスフィールド・パーク』でファニーをバートラム家に引き

取るときの理由づけと同じだ。

第3部は奴隷制に対する反論だけではなく、奴隷売買の実態を詳細に記述する。一例を挙げると、酒と引き換えに、ある王子が一定の人数の住民を提供する、との契約を奴隷商人と結ぶ。王子は夜自分の村に火を放ち、炎から逃れた住民を捕獲する。彼らは奴隷商人に1ヤードの間隔で首を皮ひもでつながれ、一列で歩かされる（図版④参照）。多くのものは奴隷船に乗る前に疲労と飢えのため死ぬ。実例を多く挙げての説明は、クラークソンの運動の根幹を成す、証人と証拠を多用しての説得と通じるところがある。



図版④ くびきでつながれ、歩かされる黒人たち（制作年不詳）

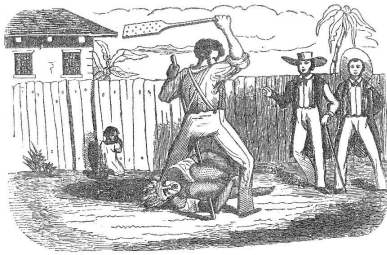
牧師の家に生まれたクラークソンは生涯敬虔なアングリカンだった。だが、キリスト教が時として奴隷貿易を正当化するために利用される欺瞞を鋭く見抜いていた。クラークソンはアフリカ大陸の立場に立ち、次のように言う。

キリスト教徒とはヨーロッパ人が自分たちを我々と区別する名称であって、その名称が何を意味するのか知りたく思う。ヨーロッパ人は自らを人間とみなす、しかし我々不幸なアフリカ人を、彼らは異教徒と呼び、獣とみなす。しかし、なんと事実は違っていることか。キリ

スト教とは何か？殺人と圧制のシステム以外のなんだというのだ。(3部1章)

捕えられ、植民地へと移送される奴隷たちのその後はまことに過酷だった。ゾング号事件の例からもわかるように、奴隷船は過密状態、不衛生、粗末な食事のため、病死者が続出した。奴隷の辱めを受けるくらいなら死を選ぶ、とまで思いつめ、絶食、身投げによって自らの命を絶つ者もいた。反旗を翻した奴隷たちもいたが、即刻処刑されるか、見せしめのため執拗な拷問を受けた。

奴隷船での苦境を乗り越えたとしても、植民地での生活もまた悲惨なものだった。朝5時から夜9時まで畑仕事や家畜の世話でこき使われ、衣食住は申し訳程度に与えられるのみで、ことあるごとに鞭打ちなどの罰を受けた(図版⑤、⑥参照)。例えば、次の箇所には奴隷の基本的な人権の剥奪に対するクラークソンの義憤と抗議を見ることができる。



Common mode of whipping with a paddle

図版⑤ 鞭打ち (制作年不詳)



図版⑥ 焼きごて (制作年不詳)

いまわしき人間よ！お前は馬を殺さないだろう。お前が乗るだけなのだから。お前は牝牛を傷つけないだろう。お前に乳を与えてくれるだけだから。お前は犬を苦しめないだろう。お前の楽しみの僕に過ぎな

いの中から。しかし、この不幸な人間からお前は楽しみと財産を得ているというのに、お前は自らの判断で、彼らを苦しめ、傷つけ、殺害するのだ！（3部4章）

クラークソンの記述の中に「アフリカ人は富、権力、名誉、名声に対する望みはない。彼らは自分たちの惨めな状況が死によって早く終わることしか望まない」（3部7章）という差別的表現もみられ、当時のイギリス人が共有した黒人奴隷への偏見は免れなかったものの、彼が命がけて奴隷貿易廃止運動に関わったのは、信仰に支えられた自由と平等の理想と人類愛ゆえだった。

ファニーの発言の裏側

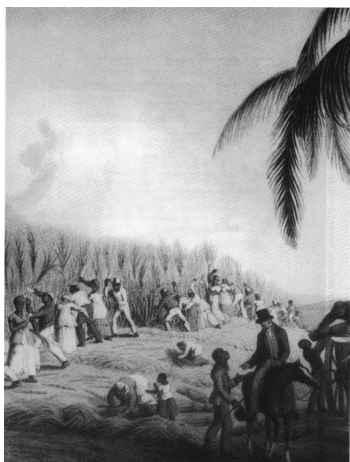
以上のように、クラークソンの著作に代表される当時の奴隷制と植民地の実態を記述した一次資料を検証すると、『マンスフィールド・パーク』には、これまでに考えられてきた以上に奴隷、植民地の言説が入念に織り込まれていることがわかる。

まず、ファニーと奴隷の類似性だが、これは実に少女時代から始まる。ファニーをバートラム家に引き取るきっかけは子沢山で貧乏所帯のプライス家への援助だ。「ちゃんと面倒を見てやらなければ、家族から引き離して親切の代わりにむごいことをするのではないか」¹²と危惧するサー・トマスに対して、ノリス夫人は、プライス夫人（Mrs Price）はファニーにろくなことをしてやれない、ファニーを教育し、世に出すことが一族の長であるサー・トマスの義務である、バートラム家で暮らすことはファニーにとって利点が多々ある、などと述べ、サー・トマスを説得する。ノリス夫人の説得には、プライス家は劣等人種が住む無秩序で未開発な植民地で、

一方バートラム家は知性教養が優れた人間が住む文化的な本国であるとの言説がみられる。以降、ノリス夫人はファニーの幸福をありとあらゆる手を尽くして奪う。ポーツマスからバートラム家に向かう馬車は奴隷船の表象であり、ファニーに感謝と服従の義務を説教し続けるノリス夫人は甘言を弄する奴隷商人になぞらえられ、ファニーに売られていく少女奴隷の面影を重ねることは容易だ。クラークソンは故郷から無理やり引き離された奴隷の惨めな状況を再三再四書くが、ファニーも同じように家族を恋しがって意気消沈している。

サー・トマスはノリス夫人のことを内心煙たがっているのだが、ことファニーの教育方針に関しては、ノリス夫人と見解を同じくする。ファニーはバートラム家の子供たちとはすべての面で劣った存在であるということを知徹底させるということだ。この方針は功を奏し、ファニーは少女時代には小間使いと同様の扱いを受ける。思春期になると、ファニーへの仕打ちは本格的虐待に発展し、心身ともに傷つけられる。典型的な出来事は何といっても、1巻7章で、サー・トマスがアンティグアに出発した直後、レイディ・バートラム (Lady Bertram) とノリス夫人の命令で、ファニーが炎天下でバラを積み、頭痛を起こすエピソードだ。ファニーの不調は、従兄のエドモンド (Edmund Bertram) とメアリ・クロフォード (Mary Crawford) の親密さに対する嫉妬が引き起こす心因性のものと従来考えられてきたが、¹³ ここでは、何事につけてもファニーの選択や都合は全く考慮されないことに注目する。ファニーの馬がメアリに与えられるのは、エドモンドがファニーの弱い立場を巧みに利用して、ファニーの同意を取り付けるためだ。また、ファニーは一人で気ままに外出したり、伯母たちに異を唱えることなど思いも及ばない。ファニーが決定権を持たず、理不尽な命令に絶対服従を強いられる状況が連鎖反応的に不調を引き起こす。炎天下でのバラ積みとパークの二度にわたる往復はれっきとした身体

的虐待だ。ファニーと、アンティグアの農園で丈が高いサトウキビを手作業で刈り取る奴隷とはオーヴァーラップする（図版⑦参照）。



図版⑦ アンティグアでのサトウキビ刈り取り作業（1823）

ファニーに加えられた一連の虐待の中でもっとも深刻なものは、3巻でファニーがヘンリー・クロフォード（Henry Crawford）の求婚を断った後、サー・トマスの命でポーツマスが生家に体よく追い返されることだ。サー・トマスの虐待はノリス夫人よりも徹底的に、しかも里帰りという名目で巧妙に行われる。クラークソンは奴隷への懲罰の代表例として身体の拘束と飲食物ぬきを挙げており、このため奴隷が短命なことを繰り返し書いているが、ポーツマスでのファニーもひどい食事と劣悪な住環境のため、拒食状態になり、目に見えて衰弱する。ファニーの追放は主人に逆らった奴隷への懲罰と奇妙なくらい符合する。

だが、ファニーと奴隷が決定的に違うのは、ファニーが理不尽な虐待に屈さず節を曲げないこと、だらしがない生家に同化しないため、家族と同じ食事を拒否し、空腹を耐え忍ぶことだ。静かな抵抗を続けるファニーは、それまで自分で何一つ決めることを許されず、誰かのいいなりになる

しかなかった無力な奴隷ではなく、自由と権利を求めて立ち上がった奴隷を彷彿とさせる。

このように、ファニーの少女時代からエドマンドと結婚する直前までの過程を見ると、何も知らないまま故郷と家族から引き離された少女奴隷が自由を奪われ、虐待された挙句、ついに雇い主に反抗し、立ち上がるまでの記録とも読める。歴史をふり返ると、1775年にアメリカ独立戦争、1791年にフランス領サン・ドミンゴでの奴隷の蜂起と1804年の独立（ハイチ）、1794年、フランス新政府による奴隷制廃止（ただし、1802年にナポレオンにより復活）、1798年のアイルランドでの反乱と、植民地で相次いで独立運動や反乱がおこった。シャーウッド（Marika Sherwood and Kim Sherwood）は1660～1834年まで西インド諸島で大小合わせて50の反乱がおこったと言う。¹⁴ その他、1795年にイギリスがジャマイカの脱走奴隷を西アフリカ、シエラ・レオーネへ拉致する、という事件もあった。となると、奴隷と同様に扱われていたファニーがサー・トマスに奴隷貿易について質問したのは、オースティンの戦略の一つだ。この点をはっきりさせるために、まず『マンスフィールド・パーク』の時代設定を確定する必要がある。

『マンスフィールド・パーク』の時代設定については研究者によって意見が分かれるが、ブライアン・サザム（Brian Southam）の説によると、サー・トマスがアンティグアに出発するのが1810年10月、帰国は2年後の1812年10月だ。¹⁵ 先に述べたように、1807年に奴隷貿易廃止法が可決され、同年植民地からの奴隷船出航禁止、1808年には奴隷のイギリス上陸禁止と矢継ぎ早に奴隷貿易撤廃に向けて法律が制定された。これらの法律のため、アフリカ大陸から公然と奴隷を調達できなくなり、2～3年間、無料の人手が少なくなった植民地農園では、減収を余儀なくされた。1巻3章でファニーが15歳の時、パートラム家所有の西インド諸島の地所で

損益があった事実が述べられ、1年後、サー・トマスが自らアンティグアに行く必要に迫られる。サザムの特定した年代とほぼ一致する。

1807年の奴隷貿易廃止法可決のあと、違法の奴隷貿易船が見つかった場合は奴隷1人につき、100ポンドの罰金を徴収された。だが、これらの法は有名無実で、船舶売却証書偽造や船籍偽装などにより、奴隷貿易は非合法に続いた。万が一発覚したとしても、船や商人が捕えられることはめったになく、最悪の場合、奴隷を海に投げ込み、証拠隠滅という非道な行為も頻発した。人権無視も甚だしいが、ゾング号事件からも明らかなように、当時の奴隷=物もしくは家畜と見なされていたし、植民地で採れるサトウキビ、コーヒー、タバコがイギリスで高く売れる、奴隷貿易そのものが儲かるという利益が全てを支配した。

以上の状況を考えると、ファニーの質問は微妙なもので、公然の秘密であった違法行為をあえて口にし、イギリス人の植民地と奴隷貿易に対する本音と建前の乖離を明るみに出したことになる。2巻3章からの次の場面が問題の箇所だ。

「でも、私、伯父様に今までよりもたくさんお話しましたわね。そうですね。昨夜、奴隷貿易について質問したのをお聞きになったでしょう」

「そうですね。他の方々ももっと質問すればよかったですね。伯父様はいろいろ聞かれるのを喜んだでしょうから」

「ええ、ですから、私もっと聞きたいと思ったんですの。でも、あの凍りついたような沈黙ときたら！お姉様たちが一言もおっしゃらず、話に全く関心がないご様子で座っていらっしゃる間、困ってしまいました。お姉様たちをさしおいて、目立とうとしているように思われるような気がしましたもの。伯父様のお話を面白く楽しいと思った

りして。伯父様はご自分のお嬢様方にこそ喜んでほしかったでしょうに」

この会話から判断する限り、ファニーの発言がサー・トマスの逆鱗に触れた様子はない。エドモンドの発言も暢気なもので、問題の会話は表向きは至極平和かつ友好的な雰囲気の中で行われたことを示唆する。ファニーにサー・トマスの奴隷所有を非難する意図はなかったことだけは確かだ。

ファニーの質問の詳細は一切語られないため、ファニーが奴隷貿易についてどの程度知っており、どのような考えであるのかテキスト最後まで不明なままだ。だが、18世紀末のイギリスの知識階級は植民地や海軍関連のことに関心を持ち、クラークソンの奴隷貿易廃止を訴える著作が売っていた状況を考えて、ファニーは奴隷貿易について相当の関心を持っていたと考えるのは妥当だ。ましてや、最愛の兄ウィリアム (William Price) が海軍勤務でイギリスを離れているのだから。また、ファニーの好きな詩人はクーパーとスコット (Walter Scott, 1771-1832) だが、クーパーが奴隷貿易反対派だったことは注目すべきである。クーパーは「黒人奴隷の嘆き」 ("The Negro's Complaint," 1788)、「哀れなアフリカ人への憐み」 ("Pity for Poor Africans," 1788) で、奴隷の悲しみと絶望、そして奴隷売買に対する義憤を非常にはっきりと唄っている。次に挙げるのは「黒人奴隷の嘆き」冒頭だ。

故郷と、そしてあらゆる楽しみから追い出されて
アフリカの海岸を何の希望もなく離れた。
見知らぬ人間の宝を増やすために
荒れ狂う大波を渡って。
イングランドから来た人が我が身を売り買いし、

はした金を払った。

でも、あの人たちは私を奴隷と登録するけれど
心は決して売られることはない。¹⁶

まことに哀調あふれる詩であり、心を動かされた読者は多かったであろう。ファニーの質問は、サー・トマス不在中もっぱら遊び呆けていた従姉たちと違い、いろいろなことを真面目に考えた末のこととみるべきだ。

ファニーの質問と同様、サー・トマスのアンティグアでの「仕事」の詳細も一切不明だ。ケンブリッジ版『マンズフィールド・パーク』の解説で、ウィルトシャーは、サー・トマスはクラークソンたちの運動に感化されたため、奴隷貿易に関しては潔白だ、と言う。¹⁷ だが、奴隷貿易廃止法に強制力がなかったことと、『歴史』に登場するノリス氏のようにわか奴隷貿易廃止賛成派がいたことを考えると、ウィルトシャーの読みは表面的すぎるのではないだろうか。『マンズフィールド・パーク』の時代設定は、人手不足による減収が植民地の農園主を悩ませていた時期だ。サー・トマス所有の農園でも人手確保はまさに死活問題で、現地の差配人ともども早急に何らかの手段を講じる必要に迫られていたことは明らかで、違法行為に手を染めなければならなかった可能性は大いにある。

さらに、クラークソンが描くアンティグアでの奴隷の生活は次の通りまことに過酷なもので、ファニーが長く奴隷に等しい扱いに甘んじざるをえなかったことも考えると、サー・トマスから奴隷を搾取する主人のイメージをどうしても払拭できない。

アンティグア島にもう一つの農園があり、そこでは似たような革命が起こった。その農園は、以前は賢明で寛大な奴隷の扱いによって有名であり、徹底していた。主人は農園に居住し、奴隷が幸福なのをみて

とった。新たに奴隷を買うことなしに数が短期間に増えたため、地所の奴隷は多すぎるくらいだった。この状況が、寛大な経営の下、主人が天寿を全うするまで続いた。その後、異なる奴隷の処遇が始まった。黄金時代は鉄の時代になった。奴隷たちは前の主人の慈しみの手で庇護されたが、その数は減り、地所は一年分の備蓄に事欠くだけでなく、借金をしている。¹⁸

サー・トマスのアンティグアでの「仕事」のうさんくさは帰国時にもついてまわる。サー・トマスは、突然帰国したのは定期船を待たず、民間の商船に乗り、リヴァプールからまっすぐマンズフィールド・パークに向かったから、と説明する。先に論じたように、リヴァプールはヨーロッパ最大の奴隷貿易の拠点だった。出版はだいぶ後になるが、『嵐が丘』(*Wuthering Heights*, 1847) で、アーンショー氏 (Mr Earnshaw) がリヴァプールから連れてきたヒースクリフ (Heathcliff) に黒人奴隷の記号が付されていることを考え合わせると、サー・トマスが乗った船は実は違法取引をする商船と言う読みもできる。つまり、サー・トマスが違法な奴隷貿易に依然関わっていた可能性も否定できない。とすれば、ファニーはまさにサー・トマスの痛いところをついたわけだ。サー・トマスはにこやかな笑顔を作りながらも、内心は大いに不快だったわけであり、後のファニー追放の遠因ともなる。エドモンドの発言は、ファニーより教育があり世の中のことを知っているだけに能天気ということになるが、彼が物事の表面しかみられない洞察力が欠けた人物であることを鑑みると納得がいく。

ジェイン・フェアファクスの真意

『マンズフィールド・パーク』に奴隷と植民地に関する言説がかくも入

念に織り込まれているなら、『エマ』のジェイン・フェアファックスの奴隷貿易を匂わせた発言にも、ガヴァネスと奴隷のアリュージュオン、エルトン夫人への反発以上のものがあるはずだ。二人の生い立ちと人間関係から推理していく。

ジェインの父は歩兵隊中尉で羽振りがよかったが、ジェインが幼いころ海外で戦死し、後を追うように母も亡くなる。養親のキャンベル大佐 (Colonel Campbell) はジェインの亡父の上官だったという縁で、ジェインを引き取り、実の娘と分け隔てなく育てた。つまり、ジェインの生みの親と育ての親は両方ともイギリスの植民地発展に命がけで関わっている。

一方、エルトン夫人はブリストルの商人の娘で、出自は次の通りだ。

ホーキンス嬢 [エルトン夫人の旧姓] はブリストルの——商人、当然そう呼ばれなければならない——の二人姉妹の妹のほうだった。しかし、件の人物の収入はほどほどのものと思われた。だから、商売もほどほどのものだったと考えても差しつかえあるまい。毎年、ホーキンス嬢は冬のある期間をバースで過ごしたものだ。でも、ブリストルが故郷だった。ブリストルのど真ん中だ。両親は何年か前に亡くなったが、叔父がいた——法律業である——法律業である以外にさしたることは伝わってこず、この叔父と一緒に令嬢は暮らしていた。エマは、叔父上はどこかの法律家の下働きで頭が鈍く出世できないのだと思った。この縁組の華々しさはもっぱら姉によるものだった。姉は玉の輿に乗り、ブリストル近くの羽振りがよい男性と結婚した。何しろ、馬車を二台持っているのだ！これがホーキンス嬢の素性であり、栄光であった。(2巻4章、傍点は原文イタリックス)

メアリ・ディフォレスト (Mary DeForest) は、このエルトン夫人の紹介

の中でブリストル出身ということが4回も出てくることに注目する。¹⁹ブリストルはイギリスの奴隷貿易発祥の地で、先に指摘したように、ロンドン、リヴァプール、マンチェスターと並び、奴隷貿易の重要拠点だった。ジェイムズ・ウォルヴィン (James Walvin) は、1740年までに奴隷貿易からの収益がブリストルの収入の40%を占めるようになった、と言う。²⁰このような状況をふまえれば、ディフォレストの指摘通り、当時の読者がエルトン夫人の出自から奴隷商人との血縁を連想した可能性は大いにある。なお、エルトン夫人の旧姓ホーキンス (Hawkins) が先に述べた奴隷貿易のパイオニア、ジョン・ホーキンスと一致することは興味深い事実として指摘しておこう。聡明だが世事に疎い主人公エマ・ウッドハウス (Emma Woodhouse) はエルトン夫人の実家の家業を大したことはない、と見くびっているが、エルトン夫人がかなりの資産を持っていることは、エルトン牧師 (Rev. Elton) 一人の収入だけでは到底無理な派手な暮らしぶり、衣服や装飾品に金をかけており、エマですら持っていない真珠のネックレスを持っていることからわかる。²¹

エルトン夫人と同様、サクリング氏と植民地との関係もまた当時のブリストルの状況から推定可能だ。ディアドリ・ル・フェイ (Deirdre Le Faye) は、サクリング氏の地所メイプル・グローヴはブリストル北東部のクリフトンという村がモデルになっており、ここには奴隷貿易で財を成した商人や西インド諸島で財産を作って帰国した農園主たちが市中を避け、移り住んだ、と言う。²²サクリング (Suckling) という姓は授乳という意味だが、搾取 (suck) という意味も隠されている。これらの間接的証拠から、サクリング氏は植民地の奴隷を搾取して財産を作った途端奴隷貿易廃止論者に転向するノリス氏のような節操のない商人だと考えられる。

以上のようにジェインとエルトン夫人のルーツを考えると、ジェインの奴隷貿易への言及は従来考えられてきたよりも、もっと深刻な意味合いを

含んでいる。次が、問題のジェインとエルトン夫人の会話だ。

「ロンドンには事務所があります。問い合わせをすればすぐ何か見つかるでしょう。売るための事務所ですわ。人間の肉体ではなくて、人間の知性を売るための」

「何ですって！人間の肉体ですって！ぎょっとするようなことをおっしゃるのね。もしも奴隷貿易のことをおっしゃっているのなら、神かけて誓いますが、サクリング氏はずっと奴隷貿易廃止支持者なんですのよ」

「そういうつもりはございませんし、奴隷貿易のことなど考えてもおりませんわ」とジェインは答えた。「ガヴァネスの仕事のこと("governess-trade")をずっと考えていたのです。その商売を斡旋する者の罪深さについては全く違うのですが、犠牲者の惨めな状況についてはどこが違うのかわかりません。でも、私が言いたいのは広告を出している事務所があって、応募さえすれば何かしらの仕事にすぐありつけるだろうということなのです」(2巻17章)

ジェインが"governess-trade"と口にするのは、望まない仕事を強要するエルトン夫人への反発もさることながら、イギリス植民地建設のために命を落とした父への哀悼と、そのため他人に依存しなければならない先行き不安な我が身への悲哀がなせるわざだ。ジェインにとっては、植民地からの搾取のおかげで贅沢三昧をしているエルトン夫妻やサクリング氏たちは強烈な憎悪の対象になりうる。ケンブリッジ版『エマ』の注では、ジェインはガヴァネスを売春に例えているのだが、ブリストル出身のエルトン夫人は奴隷貿易と勘違いし、過剰反応する、との解釈だ。²³しかし、これはジェイン、エルトン夫人、サクリング氏の経歴、及び当時のブリストルの

状況を十分読み込んでいないための表層的な理解だ。ジェインの真意は「あなたたちは植民地を搾取しているおかげで、贅沢して上品ぶっているけれど、本質はあこぎな奴隷商人そのもの」という怒りなのである。

ジェインは作品の中で沈黙していることが多いのだが、ここは唯一ジェインが自己主張をし、彼女の利発さと頭の回転の速さがわかる場面である。しかし、奴隷貿易に関する会話はこれ以上発展せず、ジェインの就職に話題は再び戻る。エルトン夫人の干渉は延々と続き、ジェインはガヴァネスになることを決意するが、あわやというところで秘密に婚約していたフランク・チャーチル（Frank Churchill）との結婚がようやく可能になり、やっと自由の身になる。これは、ファニーの発言後、皆が黙り込む以上に後味が悪い。ファニーはサー・トマスによる結婚の強要に反抗するが、ジェインはエルトン夫人が斡旋した奉公口に一時的にせよ心が動くからだ。テキスト結末にエマの婚礼衣装に対して、エルトン夫人の「白サテンとレースのヴェールはほんの少しだけ。こんな惨めなことってないわ！」（3巻19章）との酷評が差し挟まれることはエマの幸福に影を落とし、奴隷貿易で富を作った新興階級の繁栄が今後も続くことを暗示する。

奴隷貿易廃止運動の意義

ファニーとジェインの奴隷貿易への発言は会話として発展せず、不完全燃焼な感がある。それは、奴隷貿易廃止法が成立したにもかかわらず、奴隷は植民地へと売られ続け、奴隷が置かれた過酷な状況は変わらなかった、ということと対応する。ファニーの反抗は自身の健康と引き換えの両刃の剣であり、エドマンドとの結婚は懐柔されたとも取れる。ジェインはガヴァネス＝「レディだが使用人」という中産階級の末端の身分にまで下落寸前で、自力では苦境を脱出できない。ファニーとジェインの決定権の

なさは従来当時の女性の地位の低さの典型と解釈されてきたが、イギリス本国と植民地の文脈から読むと、奴隷の無力さを表すものでもある。

ファニーもジェインも、基本的には自分より優位に立つバートラム家、キャンベル家、チャーチル家に対して従順だ。彼らと自分の規範が合わないときは極力彼らの価値観を受け入れ、それによって上の階級に参入しようとする。だからこそ、彼女たちの抵抗はクーパーの詩のような直截さを欠き、不十分なのだ。未遂にされたファニーとジェインの発言は、奴隷貿易廃止法施行後も変わらぬ奴隷の状況の縮図である。

最後に、奴隷貿易廃止運動の意義について振り返る。奴隷の人権は当時革新的な発想だったが、奴隷貿易廃止運動は遅々として進まなかった。奴隷貿易によって得られる利益が非常に大きかったことと、フランス革命後の緊迫した政治情勢が主な原因だ。クラークソンたちが、まず奴隷貿易廃止だけを行い、奴隷制廃止は後回しにしたのは、奴隷貿易支持派の勢力が圧倒的な中で妥協的な方策を取らざるをえなかったということになるのだが、大局的には運動の限界を示すものといえよう。ファニーとジェインの発言に対する周囲の黙殺や曲解は理念ばかりが先走り、現実がなかなか追いつけなかった奴隷貿易廃止運動の内情を体現する。

注

- 1 オースティンの書簡は Jane Austen, *Jane Austen's Letters*, ed. Deirdre Le Faye, 3rd ed. (1995; Oxford: OUP, 1997) を参照した。引用は拙訳である。
- 2 Irene Collins, *Jane Austen: The Parson's Daughter* (London: Hambledon, 1998)14.
- 3 ジョージ・オースティンとニブズの関わりは、Frank Gibbon, "The Antiguan Connection: Some New Light on *Mansfield Park*," *Cambridge Quarterly* 11 (1982): 298-305 に詳しい。
- 4 Jane Austen, *Emma*, eds. Richard Cronin and Dorothy McMillan (Cambridge: CUP, 2005) vol.2, ch.17. 以下同書からの引用は末尾の括弧内に巻と章を示す。引

用は拙訳である。

- 5 奴隷貿易の成立、奴隷貿易廃止運動については、下記の著作を参照した。
Eric Williams, *Capitalism and Slavery* (1944; Chapel Hill, NC: U of North Carolina P, 1994); Kenneth Morgan, *Slavery, Atlantic Trade and the British Economy, 1660-1800* (Cambridge: CUP, 2000); *Slavery and the British Empire* (Oxford: OUP, 2007); Marika Sherwood and Kim Sherwood, *Britain, the Slave Trade and Slavery, from 1562 to the 1880s* (Oare, Kent: Savannah, 2007); James Walvin, *Slavery to Freedom: Britain's Slave Trade and Abolition* (Andover, Hampshire: Pitkin, 2007).
- 6 Williams 63, 105.
- 7 クラークソンの伝記については、Zerbanoo Gifford, *Thomas Clarkson and the Campaign against Slavery* (London: Anti-Slavery International, 1996); Hugh Brogan, "Clarkson, Thomas (1760-1846)," *Oxford Dictionary of National Biography* (Oxford: OUP, 2004, <http://www.oxforddnb.com/view/article/5545>) を参照した。
- 8 "To Thomas Clarkson" テキストは Ernest De Selincourt and Helen Darbishire, eds. *The Poetical Works of William Wordsworth*, 2nd ed. (Oxford: OUP, 1952-59) 3: 126 を参照した。
- 9 Thomas Clarkson, *The History of the Rise, Progress and Accomplishment of the Abolition of the African Slave Trade* (La Vergue, TN: Biblio Bazaar, 2008) vol.1, ch.17.
- 10 John Wiltshire, Introduction, *Mansfield Park* (Cambridge: CUP, 2005) xlvi.
- 11 Thomas Clarkson, *An Essay of the Slavery and Commerce of the Human Species, Particularly the African* (La Vergue, TN: Kessinger, 2009) pt.2, ch.4. 以下同書からの引用は末尾の括弧内に部と章を示す。
- 12 Jane Austen, *Mansfield Park*, ed. John Wiltshire (Cambridge: CUP, 2005) vol.1, ch.1. 以下同書からの引用は末尾の括弧内に巻と章を示す。引用は拙訳である。
- 13 この場面の心理的考察については、Alice Chandler, "A Pair of Fine Eyes': Jane Austen's Treatment of Sex," *Studies in the Novel* 7 (1975): 94; Anita G. Gorman, *The Body in Illness and Health: Themes and Images in Jane Austen* (New York: Peter Lang, 1993) 64-65; Patricia Menon, "The Mentor-Lover in *Mansfield Park* : 'At Once Both Tragedy and Comedy'," *Cambridge Quarterly* 29 (2000): 15; Akiko Takei, "'Your Complexion is So Improved!': A Diagnosis of Fanny Price's 'Dis-ease'," *Eighteenth-Century Fiction* 17 (2005): 691-94 を参照。

- 14 Sherwood and Sherwood 57.
- 15 Brian Southam, "The Silence of the Bertrams: Slavery and the Chronology of *Mansfield Park*," *TLS* 17 Feb. 1995: 13.
- 16 "The Negro's Complaint" テキストは J. C. Bailey, ed. *The Poems of William Cowper* (London: Methuen, 1905) 453-55 を参照した。
- 17 John Wiltshire, Notes, *Mansfield Park* (Cambridge: CUP, 2005) 693.
- 18 Thomas Clarkson, *An Essay on the Impolicy of the African Slave Trade* (1788; La Vergue, TN: Kessinger, 2009) pt.2, ch.1, se.1.
- 19 Mary DeForest, "Mrs. Elton and the Slave Trade," *Persuasions* 9 (1987): 11-13.
- 20 Walvin 11.
- 21 オースティンの時代、フランスからの流行で真珠を身に着ける習慣はかなり広まっていたが、真珠養殖の技術はまだなく、真珠のネックレスは富裕層のみに許された贅沢品だった。
- 22 Deirdre Le Faye, *Jane Austen: The World of Her Novels* (London: Frances Lincoln, 2002) 271.
- 23 Richard Cronin and Dorothy McMillan, Explanatory Notes, *Emma* (Cambridge: CUP, 2005) 579.

本稿は 2011 年 7 月 3 日に開催された第 4 回日本オースティン協会大会シンポジウム「ジェイン・オースティンが書いたイギリス—再読で浮かび上がる変動の時代」で行った発表に加筆したものである。

本稿は平成 23 年度科学研究費補助金による成果である。

参考文献

- Austen, Jane. *Emma*. Eds. Richard Cronin and Dorothy McMillan. Cambridge: CUP, 2005.
- . *Jane Austen's Letters*. Ed. Deirdre Le Faye. 1995. 3rd ed. Oxford: OUP, 1997.
- . *Mansfield Park*. Ed. John Wiltshire. Cambridge: CUP, 2005.
- Brogan, Hugh. "Clarkson, Thomas (1760-1846)." *Oxford Dictionary of National Biography*. Oxford: OUP, 2004. [<http://www.oxforddnb.com/view/article/5545>]

- Chandler, Alice. "'A Pair of Fine Eyes': Jane Austen's Treatment of Sex." *Studies in the Novel* 7 (1975): 88-103.
- Clarkson, Thomas. *An Essay on the Impolicy of the African Slave Trade*. 1788. La Vergue, TN: Kessinger, 2009.
- . *An Essay of the Slavery and Commerce of the Human Species, Particularly the African*. 1786. La Vergue, TN: Kessinger, 2009.
- . *The History of the Rise, Progress and Accomplishment of the Abolition of the African Slave Trade*. 1808. 2 vols. La Vergue, TN: Biblio Bazaar, 2008.
- Collins, Irene. *Jane Austen: The Parson's Daughter*. London: Hambledon, 1998.
- Cowper, William. "The Negro's Complaint." 1788. *The Poems of William Cowper*. Ed. J. C. Bailey. London: Methuen, 1905. 453-55.
- Cronin, Richard, and Dorothy McMillan. Explanatory Notes. *Emma*. Eds. Richard Cronin and Dorothy McMillan. Cambridge: CUP, 2005. 532-600.
- DeForest, Mary. "Mrs. Elton and the Slave Trade." *Persuasions* 9 (1987): 11-13.
- Gibbon, Frank. "The Antigua Connection: Some New Light on *Mansfield Park*." *Cambridge Quarterly* 11 (1982): 298-305.
- Gifford, Zerbano. *Thomas Clarkson and the Campaign against Slavery*. London: Anti-Slavery International, 1996.
- Gorman, Anita G. *The Body in Illness and Health: Themes and Images in Jane Austen*. New York: Peter Lang, 1993.
- Le Faye, Deirdre. *Jane Austen: The World of Her Novels*. London: Frances Lincoln, 2002.
- Menon, Patricia. "The Mentor-Lover in *Mansfield Park*: 'At Once Both Tragedy and Comedy.'" *Cambridge Quarterly* 29 (2000): 145-64.
- Morgan, Kenneth. *Slavery and the British Empire: From Africa to America*. Oxford: OUP, 2009.
- . *Slavery, Atlantic Trade and the British Economy, 1660-1800*. Cambridge: CUP, 2000.
- Sherwood, Marika, and Kim Sherwood. *Britain, the Slave Trade and Slavery, from 1562 to the 1880s*. Oare, Kent: Savannah, 2007.
- Southam, Brian. "The Silence of the Bertrams: Slavery and the Chronology of *Mansfield Park*." *TLS* 17 Feb. 1995, 13-14.

- Takei, Akiko. "'Your Complexion Is So Improved!': A Diagnosis of Fanny Price's 'Disease.'" *Eighteenth-Century Fiction* 17 (2005): 683-700.
- Walvin, James. *Slavery to Freedom: Britain's Slave Trade and Abolition*. Andover, Hampshire: Pitkin, 2007.
- Williams, Eric. *Capitalism and Slavery*. 1944. Chapel Hill, NC: U of North Carolina P, 1994.
- Wiltshire, John. Introduction. *Mansfield Park*. Ed. John Wiltshire. Cambridge: CUP, 2005. xxv-lxxxiv.
- . Explanatory Notes. *Mansfield Park*. Ed. John Wiltshire. Cambridge: CUP, 2005. 639-738.
- Wordsworth, William. "To Thomas Clarkson." 1807. *The Poetical Works of William Wordsworth*. Eds. Ernest De Selincourt and Helen Darbishire. 2nd ed. 5 vols. Oxford: OUP, 1952-59. 3:126.